

变奏曲

五木寛之



新潮社版

へん そう きょく
変奏曲

価六五〇円

一九七三年六月三十日発行
一九七三年九月三十日四刷

著 者 五木寛之
いづき ひろゆき

装幀者 赤坂三好

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話 (03) 二六〇一 一一一

振替東京八〇八

二光印刷 新宿加藤製本



© 1973 Hiroyuki ITSUKI, Printed in Japan

乱丁、落丁本はお取替えいたします。

变奏曲



雨の中を人々はゆっくり歩いていった。かなり激しい雨なのだ。それなのに男たちはポケットに手をつっ込んだまま平気な顔で喋りながら歩いて行く。

若い娘たちもそうだった。固くびったりとなでつけた麻色の髪や、暗褐色の縮れた髪が水滴で濡れるのを、彼女らはまったく気にしていないかのように額をあげて雨の中を歩いている。

へ白人たちの髪は濡れてもすぐ乾くからだわ

杏子はカフェの奥の席に両膝をきちんとそろえて坐り、通りを眺めていた。テーブルの上に手をつけていないコーヒーが、白い肉厚のカップの中で暗い沼のように鈍く光っている。濡れた髪を指でかきあげながら外からはいつてきた若い赤毛の青年が、独りでぼんやり坐っている杏子に気づく。彼は大胆な視線でまっすぐ彼女をとらえようとする。彼らヨーロッパ人たちの目にはまだ充分性的な関心をそそる存在であるかもしれない仕立てのいい服を着た東洋人の女。

杏子はその視線に気づき、わずらわしい気分でテーブルの上のカップに目を伏せる。

黒い艶のある液体の表面に天井のガラス飾りの白い光が反射していた。首をのぼしてのぞきこむと、その中に自分の顔が下から見あげる角度でうつって見えた。三十九歳の女の顔が、逆光になって黒い鏡の中にある。

杏子はスプーンをカップの中に沈めてかき回した。黒い鏡がこわれて自分の顔が見えなくなった。杏子の隣りに坐ることをあきらめた青年は、道路に面した端のテーブルに腰をおろした。そこでは北欧からやってきたと思われる大柄な健康そうな金髪の娘たちが、フランス語でも英語でもドイツ語でもない言葉で陽気に喋りあっているのだ。

乾いたタンバリンの音がどこから近づいてきた。杏子は顔をあげて、やや小降りになった舗道のほうを眺める。布でおおった荷車のようなリヤカーを引いて、黒い髪と褐色の肌をした老女がこちらへやってくるのが見えた。その車のうしろから六つか七つ位の痩せた少女が、タンバリンを膝に当てて鳴らしながら歩いてくる。杏子の坐っているカフェの店先で老女はリヤカーを止めた。そして店内の客たちに前歯の欠けた口を歪めて笑いかけると、ゆっくりした動作で車の中から傘をとり出し、それを荷台に紐でしばりつけた。開いた傘が、きのこのように直立すると、彼女はその下に黒い四角な箱を置いて、ふたをあける。ポータブル式の旧式な蓄音機だ。やがて早いテンポのジブシーのメロディーが雨の舗道にひろがった。

老女はつぎの当たった汚れたスカートを指でつまみ、葡萄色のショールを片手で頭上にひるが

えず。そして尖った顎を引いたまま、かすかに足ぶみはじめた。少女がタンバリンを強く鳴らし、幼い声で鳥の鳴くような掛け声をかける。店内の客たちは新聞をひろげたり、煙草をくゆらせたりしながら、雨の中で踊り続けるジブシーの母子を無表情に眺めている。

一曲終って老女は欠けた歯をむき出して微笑した。やがて女の子が銅のフライパンを持って店内にはいつてくる。客たちは相変らず無表情にポケットを探り、小さな額のコインを銅の皿に投げた。杏子は黒い目を光らせながら近づいてくるジブシーの少女に気づかないふりをしてコーヒースプーンをすすった。

少女が杏子の前に立ちどまって声をかけた。まったく哀願の響きのない強い口調だ。この街へやってきて以来、一日に何度となく出会う、押しの強い要求の口調。ホテルのフロントで、商店で、そしてタクシーの中で、いたる所できかれる強い人間たちの声音に、杏子は苛立ち続けてきた。控え目、ということのない、自己主張のあらわなその口調が彼女をひどく疲れさせる。杏子は知らぬふりをし続けた。

「マダム——」

「ノン」

と、杏子ははっきりした声で言った。そして断乎たる態度で首を左右にふる。さっきの青年が驚いたように杏子をふり返った。

「マダム」

ジブシーの少女は銅のフライパンを杏子の前にさし出し、感情をおさえた強い声で再び催促する。

「ノン」

杏子は自分の声がわずかに弱々しくなったことに気づき、顔をあげて少女の目をみつめた。大きな黒い瞳が杏子の視線をはね返すように光っている。その目の中に杏子は子供のものではない一種の敵意を認めて、唾をのみこんだ。

「だめよ。お金なんかあげないわ。あっちへ行きなさい。あたしはあたしのしたいようにするのよ」

杏子は周囲の客の誰にもわからない日本語で女の子に言う。女の子は濡れた髪からしたたり落ちる水滴をぬぐおうともせず、石になったように杏子の前に立っている。少女が息をするたびに瘦せた胸が静かに上下した。彼女はじつと杏子の目から視線をそらさない。周囲の客が横目で杏子と少女のにらみ合いを注視しているのを感じると、杏子は急に恥ずかしくなり、バッグの中から五フラン紙幣をさがし出してフライパンの上においた。少女はちらと目を伏せてその紙幣を眺めた。それから貴夫人のような威厳のある動作で五フラン札をつまみあげ、かすかに嘲りの微笑をうかべると、無言でそれを杏子の前につき返した。

「ノン」

と、少女は勝ちほこった声で言い、杏子に背中をむけて離れて行った。杏子は客たちの視線

の中で少し固くなりながら、給仕を呼び、その五フランで勘定を払ってテーブルを立った。瘦せたジプシーの少女の、ノン、という強い声が頭の奥にくり返しきこえてきた。

へあたしはもっと早くノンを言うべきだったのだ

それにちがいない。もっと早く、そうだ、五年、いや十年、もっともっと以前にだ。今はもうノンを言ったところで何の役にも立ちはない。今のようには手きびしいしつべ返しをくらう位が落ちだろう。

タンバリンの音がゆっくり遠ざかって行く。杏子は雨の中を額をまっすぐあげて歩きだした。

夜になっても雨はやまなかった。杏子は下着まで濡れながら街路樹の下を歩いていった。左の靴の踵がぐらぐらする。さっき舗道の敷石の間にはさんで転びかけた時に曲ったにちがいない。空腹だが食事をする気持ちはなかった。独りでいると、料理店にはいたりするのが、とてもおつくうなのだ。今日はほとんど食事らしい食事はしていない。彼女はふと、もう一週間ちかく会っていない夫のことを考えた。いまごろ彼はブラハのホテルでビールでも飲んでいるのだろうか。ビルゼンのビールのことを、彼は出発前から何度も楽しそうに喋っていたのだ。

交差点を渡る時に、左の踵が折れた。杏子は靴を脱ぎ、手にもって歩き出す。誰もふり返ってじろじろ見たりしないので気が楽だった。樹の梢から大きな水滴が落ちてきて杏子の首筋を打った。

〈寒い——〉

ヨーロッパの夏は皮のコートが必要になると、夫の彰治から言われていたのだが、彼女はわざとその忠告に逆らって軽い仕度だけでやってきたのだ。いつもそうだった。彼の忠告に逆らっては後悔することになる。それがわかつていながら、いつも杏子は夫の言葉に素直に従う気持ちになれないのだ。

へどこかでお酒でも飲もうか？

雨の中をフォグランプを点けた車は速度を落さずに走り過ぎる。車のはねた水が激しく横顔にかかったのを濡れたハンカチでぬぐいながら、杏子は明るい灯のともった通りのほうへ曲って行った。しばらく歩いたのち、十字路の角の、ありふれたカフェにはいつて、隅のテーブルに腰をおろした。

「コニヤックを一つ」

政治家のような堂々たる顔つきの給仕に発音に気をつけながら頼むと、杏子は椅子にもたれて片足をのばす。店内には五、六組の客がいるだけで、明るい照明にもかかわらず、どこことなく陰気な店の雰囲気だ。彼女の坐っている椅子の横の壁が、全面鏡張りになっていて、反対側の隅にいる客の横顔がうつっているのを、杏子は見るともなしに眺める。

葡萄酒のびんを前に坐っている髪の黒い中年の男。太いふちのサングラスをかけていて、少しくたびれた感じはあるが、どこことなく自由な職業にたずさわっている男の雰囲気は横顔にあ

る。だがその沈んだ肌の色と骨格は、あきらかに東洋人のものだ。

杏子は鏡から顔をそむけて、運ばれてきたコンьяックのグラスを口に運んだ。熱いものが体を降りて行くのが気持ちよかった。

へ日本人かもしれない

杏子はもう一度鏡の中の横顔を眺めた。日本人だったらどうかというのか。この季節の Пари は、どこへ行っても同国人に出会わないことはない。日本人と隣り合せに坐ろうと、同じホテルに泊ろうと、目礼さえもせずお互いに知らぬ顔ですれちがうだけだ。今はもう気まずい思いさえしなくなっている。それなのにどうしてあの男の存在が気になるのか？

杏子は首を振ってコンьяックを飲みほした。給仕を呼び、おかわりを頼んで、もう一度、反対側の壁際の男の客を眺めた。

無精ひげののびた横顔が太いサングラスのふちで二分されていて、どことなくけわしい意志的な感じをあたえている。東洋人としては大柄な方だろう。額のはえ際がやや薄くなっている。そのためにかえって知的な印象があった。淡いペンシルストライプの紺の背広はかなりくたびれて見え、靴の踵も斜めにすりへっているようだ。青いシャツに白っぽいネクタイをしめ、レインコートを隣りの椅子の背にかけている。

杏子のそんな視線に気づいたように、男が振り返った。翳った大きなサングラスの背後から、彼は彼女をみつめた。杏子はコンьяックのグラスに目を伏せ、それから突然、顔をあげてその

男の顔を注視する。

へどこかで会ったことがある——だが、一体どこで？」

杏子のほうを見ていた男の顔にも、サングラスの下で変化があらわれるのを彼女は感じた。男はやや不自然に顔をそむけ、杏子に関心のないそぶりで葡萄酒のグラスを持ちあげた。その手がこわばったまま、男の横顔に或ることを決意しようかするまいかと、迷っている気配が揺れた。カフェの明るい照明が、その内心の動きを彼の額と頬にはっきりとうつし出す。杏子は怖いものを見た幼児のように、思わず視線をそらせた。店の外で稲妻の青い光が周囲の風景を幻燈のように一瞬うかびあがらせた。雨脚が白く輝き、再びまた夜の中に溶けこんで消えた。

「ボンビドーは面白い男だよ」

杏子の背後で、給仕の一人がカウンターに汚れたグラスを置きながらバーテンに言った。

「面白い男だ。え？　そうは思わないか」

杏子には給仕の喋ったフランス語の意味がわかった。簡単な日常会話では、なかなか相手の言うことを即座に理解できない場合が多いのに、その給仕の言葉はすんなりと伝わってきた。ボンビドーは面白い男だ、と給仕は言ったのだ。彼女は必死でそのことだけを考えようとした。ボンビドーは面白い男だ、そうなのだ。なぜ彼が面白いというのだろう？　だが彼女のそんな努力は無駄だった。彼女の頭はひどく混乱して、ちゃんとものを考えることができない。

杏子は立ちあがって外に出ようとする。そんなはずはない。絶対に。そこにいるのが彼だ

などと、どうして考えることができるだろう。杏子は再び給仕たちのフランス語の会話を理解しようと耳を傾ける。ほかのことを考えるのだ。自分とかかわりあいのあることをではなく、全く関係のない他の人間たちのことを。

だが、杏子の目は彼女の決意とは反対に、壁際に坐ってこちらを見ているサングラスの男の顔に向けられたままだった。その黒い大きな眼鏡の陰に隠された部分に何があるのかをまさぐるように杏子はみつめる。

「ムシュウ・シルヴブレ——」

杏子は助けを呼ぶようにかすれた声をあげる。給仕が彼女の方をちらと眺め、自分たちの会話を打切って大股に近づいてくる。

「ウイ」

「コニャックをもうひとつ、お願い」

「ウイ・マダム」

杏子は手脚から力がなえて行くのを感じ、もう何に対しても抵抗するのをやめようとする。事實は事実なのだ。そこにいるのが彼であればそれはひとつの再会ということだし、もし人違いならばまだ自分の心のどこかに彼の記憶が残っていたことを知るだけのこと過ぎない。いずれにせよ、自分はここにいる。雨に濡れ、何杯かのコニャックに体を火照らせながら、異国のありふれたカフェに独りきりで坐っているのだ。

給仕が三杯目の酒を運できたとき、壁際の男がゆっくりと立ちあがった。片手で葡萄酒のびんを押しのけ、椅子をうしろに引いて自信にあふれた確実な動作でテーブルを離れる。その顔にはもう、さっきまでの迷いや動揺の影はない。しっかりした足どりで、まっすぐ彼女のほうへ歩いてくる。

杏子は胸がしめつけられるような気がした。そのやや左の肩をさげた姿勢、大腿で確実な歩きかた、のどもとに引きつけられた顎の位置、そのすべてがはつきりと遠い時間を逆流させ、十数年前の彼を思い出させる。

「しばらく」

男の声が杏子の耳に爆発音のようにひびいた。「ひどい雨だな」

そうなのだ。こんな言い方を、いつもどこかしら気取りのある言い方をする青年だった。あれから随分たって、すっかり大人になってしまったはずなのに、ちっとも変わっていない。あれは彼の若さのせいではなく、彼は本来こういう言い方をする人間だったのだ。

「コニャックを飲んでるの。もう三杯目よ」

杏子は感情のたかぶりを必死でおしころして、おだやかな声で応じる。みんな昔のままだ。喜怒哀楽を露骨に表わさない喋り方、そして自分たちを物語や芝居の中の人物のように振舞わせる応対の仕方。

「ぼくは葡萄酒を飲んでる。かなり飲めるようになったんだ」

「あなた、昔はまるぎり飲めなかったのね」

「飲まなかった、と言ったほうが正確だろう」

変っていいない、ちっとも、と杏子は懐かしきで叫びなくなる気持ちを辛うじて押しとどめて
呟く。

「目が悪いの？ そんな大きな眼鏡なんかかけて」

「いや」

彼は杏子の向いの椅子を引いて腰をおろした。給仕のほうに手をあげて、慣れたフランス語の発音で自分にもコニャックを頼んだ。

杏子は目をあげて、まっすぐ相手を眺めた。そのサングラスをとって、と叫びかけたとき、
彼が眼鏡をはずした。

「あたしのこと、憶えていたのね」

彼女は溜め息と共に呟く。彼はうなずいて、落着いた声で言う。

「すぐに君だとわかった。でも、声をかけようかどうしようかと迷ってたんだ」

「あたしはなかなかわからなかったわ。しばらく、観察していたの。でも、最後まで確信がも
てなかったし——」

給仕たちはこちらの様子を気にしながら、静かに店内の掃除にかかっていた。すでに奥のコー
ナーの明りは消されて、カウンターの上にガラス器や灰皿などが鈍く光って並べられている。

舗道に面したテーブルには、一組の若いカップルが抱きあって飽くことのないキスを続けている。雨が彼らの足もとにはね返っているが、その二人はむしろ濡れることを楽しんでるかのようには動かない。店から流れ出る光の縞の中を、小型のシムカー〇〇〇が、続いてシムカとそっくりの外見を持った旧式のルノーが、しぶきをあげながらかなりの速度で走りすぎる。杏子は黙って外を眺めた。何を言うべきかを考えているのだった。思いがけない再会に、本当はひどく感傷的になってしまっているのだ。だが、それを彼にさとられたくない気持ちで彼女を無口にしていた。

「よく降るな、まったく」

彼が静かな柔らかい声で言う。杏子はグラスを支えた男の筋ばった指をじっとみつめた。

この指。議論に熱中すると、学生の頃の彼は、その指をナイフのように空中にひらめかせて相手を断定的に威嚇したものだ。杏子はそんな時の彼の言葉のひとつを、今もはっきりと憶えている。

「——君らはマルクス学者だが、ほくはマルクス主義者だ。彼が何と書いているかが問題なんじゃない。彼がなにを心の中で意図してそれを書いたかがぼくには判るのだ」

彼が響きのある声でそう言う時の表情を彼女は記憶の深い淵から呼びおこそうとする。十五年前、いや、もっと以前のことだ。あの頃の自分はどんな顔をしていただろう、と彼女は考えた。